研究報告

地域で暮らす高齢者の見守りの概念分析

Concept Analysis of “Mimamori” for Community-Dwelling Elderly People

神崎由紀

Yuki Kanzaki

キーワード：見守り，地域で暮らす高齢者，概念分析

Key words：mimamori, community-dwelling elderly people, concept analysis

Abstract

Purpose : This study aimed to establish a definition of the concept of “mimamori” as it relates to community-dwelling elderly people by clarifying the components that comprise “mimamori.”

Methods : The concept of “mimamori” was defined using Rodgers’ concept analysis method. A literature review was conducted by searching the Ichushi-Web, PubMed and CINAHL databases. From among the 257 identified articles, 55 were randomly selected for analysis. Attributes, antecedents, and consequences were analyzed qualitatively.

Results : The attributes of “mimamori” for community-dwelling elderly people included the following three categories: “maintaining distance by considering the feelings or circumstances of elderly people,” “confirming the safety of elderly people by observation and/or measurement,” and “understanding the needs of elderly people by cooperating with people and institutions in the community.” In addition, both antecedents and consequences were found to comprise four categories. The antecedents were roughly divided into factors related to the elderly people and factors that surround elderly people. Consequences were found to comprise the involvement of the family and community in addition to the effects on the elderly individual. Subsequently, the concept of “mimamori” was defined based on the attributes.

Conclusion : The present results indicate that the concept of “mimamori” can be utilized in the development of research and education contributing to the support of community-dwelling elderly people. Furthermore, this concept can be used to promote preventive measures and the community health nursing activities of regional organizations.

要 旨

目的：地域で暮らす高齢者の見守りについて概念分析し，構成要素を明らかにして概念を定義すること。
方法：Rodgers（2000）の概念分析の手法を用いて概念を定義した。文献は，医中誌 Web および PubMed，CINAHL を使用し，検索された 257 文献から無作為に抽出した 55 文献を対象とした。概念の属性，先行因子，帰結について質的に分析した。

結果：概念の属性は【心情や状況を考慮した距離の保持】【観察や測定による安否の確認】【住民や機関が協力した対象の把握】の 3 カテゴリーであり，先行因子と帰結はそれぞれ 4 カテゴリーで構成された。

受付日：2012 年 5 月 8 日 受理日：2012 年 10 月 22 日

首都大学東京大学院人間健康科学研究科博士後期課程 Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

E-mail: kanzaki-yuki@hs.tmu.ac.jp

先行因子は、高齢者の要因と高齢者を取り巻く要因に大別された。帰結は、個々の高齢者への影響と、家族や地域の人々の関係を含む概念であった。そして、属性を基に概念を定義した。

結論：本概念は、わが国の公衆衛生看護実践での高齢者の実態把握や予防活動の推進、地区組織活動の促進、教育・研究活動の向上のために活用可能である。

I. 序 論

わが国では、高齢化や核家族化の進行、居住環境の変化に伴い、高齢者の社会的孤立が注目されている（厚生労働省、2008）。この社会的孤立は、高齢者の生きがいの低下や消費者被害、孤立死をもたらすことが指摘されており、孤立を防ぐための見守りや居場所づくり（内閣府、2011）、見守りツールや見守りシステムの開発（厚生労働省、2008）が行われている。さらに、見守りは高齢者虐待の早期発見や認知症高齢者等への支援、災害時の被害拡大の予防にも有効に機能するもの（厚生労働省、2008）と考えられており、地域で暮らす高齢者の支援を検討する上で重要な概念であるといえる。

しかしながら、見守りという言葉は、専門職・非専門職によって安易に使われる傾向にあること、意味づけの幅が広く曖昧である（西村ら、2008）ことが指摘されている。従来、公衆衛生看護学分野における高齢者の支援は、主に自治体の保健師が担ってきた。しかし、2005年の介護保険法改正後、地域包括支援センターが設置（厚生労働省、2006）され、その役割は自治体保健師のほか、委託法人の保健師や看護師へと変化している。さらに地域の高齢者の見守りは、保健医療福祉専門職に加え、近隣住民や家族、他分野の専門職やボランティア（厚生労働省、2008）など多職種により行われている。

このことから、高齢者の見守りの概念を公衆衛生看護学の実践や研究に活用する場合、社会の変化や制度改正に伴う多職種の存在や環境の多様化、立場や価値観の相違により、概念の使われ方の幅は広く定義が不明瞭となっていると考えられる。このような概念の明確化のため、概念分析という方法がいくつかあるが、Rodgers（2000）の手法は、概念は時間や状況と共に変化するものという哲学的立場に基づいており、概念の使われ方や文脈に焦点を当て対象概念の定義を明確化し、看護知識の理解の促進と発見的な機能を果たす。

そこで本研究は、Rodgers（2000）の概念分析の手法を用いて、地域で暮らす高齢者の見守りについて概念分析し、構成要素を明らかにして概念を定義するこ

とを目的とした。

II. 方 法

本研究の対象概念は、社会背景や時代の変化により概念の使われ方が多様化していると推測される。そのため、概念は時間や状況と共に変化するものという哲学的立場に基づくRodgers（2000）の概念分析の手法が適していると考えた。

この分析方法は、対象となる概念と、類似した考えを表現する語である関連表現を特定する。データ収集範囲を特定して文献を選択する。そして、文献の内容について、概念の使われ方に着目して、その概念の特性や性質は何かを示す「属性」、概念発生の前に生じていることは何かを示す「先行因子」、また、概念が生じた結果、何が起きるのかを示す「帰結」について質的に分析し、概念を定義するという方法である。

1. 対象概念と関連表現の確認

本研究は、地域で暮らす高齢者の見守りを対象概念とした。日本の看護学分野では、見守りは「必要な介助、支援ができるような体制を整えて、意図的に対象の行為や様子を観察すること」と定義し、観察を同義語としている（日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会、2005）。しかし本研究で対象とする見守りは、多分野にわたり、専門職・非専門職を含むことが考えられる。そこで観察は類似した考えと捉え関連表現として特定した。

2. データ収集方法

データ収集文献は、地域の高齢者を対象としたものに限定した。検索システムは医学中央雑誌 Web 版、PubMed、CINAHL を用い、キーワードは、和文献では「見守り」と「見守る」、英文献では「monitoring」とし、「高齢者」と「地域」を対象とする文献を検索した。検索対象期間は、2001 年 1 月～2011 年 6 月として検索した。検索の結果、和文献 148 文献、英文献 109 文献、合計 257 文献が検索された。さらに、Rodgers（2000）は対象概念を学際比較するため、各

分野を階層化して無作為に抽出し、最低 30 項目あるいは母集団全体の 20% のうちどちらか多いサンプルから選択すると述べている。本研究では、全文献の 20% となる文献について分野ごとに無作為抽出を行い、さらに二次文献を加えた 55 文献を概念分析の対象とした。対象文献の内容を分野別に示すと、看護学 24 文献、福祉学 9 文献、工学 9 文献、医学 11 文献、リハビリテーション学 2 文献に分類できた。

3. 分析方法

分析は、対象文献を収集した後、コーディングシートを作成した。コーディングシートは、文献ごとに見守りの概念の使われ方に着目しながら、関連概念、属性、先行因子、帰結の項目をできるだけ言葉や段落の通りに記録して抽出した。さらに、属性、先行因子、帰結それぞれについて質的に分析を進め、カテゴリ化し記述した。そして、構成要素を明らかにした後、概念を定義した。

Ⅲ. 結 果

1. 地域で暮らす高齢者の見守りの構成要素

分析の結果、地域で暮らす高齢者の見守りの構成要素として、4つの先行因子、3つの属性、4つの帰結が抽出された（図 1）。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを《 》で示す。

地域で暮らす高齢者の見守りの構成要素は、先行因子が高齢者の要因と高齢者を取り巻く要因の 2 つに大別され、これらによって見守りが生じていた。そして属性は、高齢者の【心情や状況を考慮した距離の保持】を基本姿勢として、【観察や測定による安否の確認】と【住民や機関が協力した対象の把握】を行うことであった。この 2 つの要素は、安否確認や対象把握という目的のために、観察や測定、住民や機関の協力という方法を用いて、状況に応じて、相互的に関与していた。その結果見守りは、高齢者の【日常生活の維持】や【個人の状況に合った予防的支援の促進】、高齢者や家族、地域の人々の【安心感の獲得】、地域の【人

図 1 地域で暮らす高齢者の見守りの概念図

やサービスとの結びつきの拡大】を導く関係にあった。

1) 属性

地域で暮らす高齢者の見守りの属性は、【心情や状況を考慮した距離の保持】【観察や測定による安否の確認】【住民や機関が協力した対象の把握】の3カテゴリであった。

【心情や状況を考慮した距離の保持】は、見守る側の基本姿勢を示す属性である。見守りは、場合によっては監視や拘束、精神的負担となり得ることから、プライバシーの侵害や精神的負担に配慮（森，2011；本谷ら，2008；鳥越，2009）すること。さりげなく（森，2011），無理なく何気なく，そっと（長谷川，2010），日常生活での手伝い（武井，2011）や他の援助を行いながら（青山ら，2009），家の外から様子うかがう（榊田ら，2009），明確な支援を行っていない（斉藤ら，2010）という，《日常を妨げないさりげない関係》によって行われていた。また，支援の必要性がある者に対しては，緊急対応を含み（帯刀ら，2009），先を予測して（青山ら，2009），訪問や電話により定期的あるいは随時声をかけ（青山ら，2009；榊田ら，2009；津村，2008；Mundt et al., 2007；大曾根ら，2004），関心を示すこと（青山ら，2009），いつでも援助できるように近くにいること（松村ら，2006；杉山ら，2003），すぐに支援できる体制を整えること（鳥越，2009）。さらに，対象のもつ力を信じて，できるだけ待つ（山中，2008），対処時期を見極める（津村，2008），ハイリスク高齢者は，定期的・継続的（榊田ら，2009）など対象者の状況に応じて関わる頻度や手段について《支援の時期や方法を予測した距離の保持》をしていた。この属性では，プライバシーの配慮については，機器等を開発・使用する工学系の分野で，関わりの姿勢については，看護学や福祉学の分野で使用されていた。特に，身体的な支援の必要性が高い高齢者に対する介入の時期や方法については，看護学分野で使用されていた。

【観察や測定による安否の確認】は，見守る側（支援者）が対象者個人に対して行う見守りの視点や手段，目的を示す属性である。ゴミ出し（高橋，2010）や電気の点灯（長谷川，2010；高橋，2010；本谷ら，2008），新聞や洗濯物（長谷川，2010）の状況，家庭用機器の使用頻度（Calvert et al., 2009；本谷ら，2008）や水道の使用量（高橋，2010；鈴木ら，2005）などから《日々の暮らしぶりの把握》を行い，高齢者

の元気な状況を確認（加藤，2002）すること。また，住居に設置したセンサやモニタ，加速度計等（森，2011；酒井ら，2010；Dijkstra et al., 2010；Hayes et al., 2010；鳥越，2009；Harris et al., 2009；Koizumi et al., 2009；加藤，2002）《機器による人の動きの測定》を行うことにより活動状況を確認すること。さらに加齢や既往に伴う健康課題に応じて，歩行の付き添い（青山ら，2009）や，体重移動やバランス，姿勢の観察（Dijkstra et al., 2010；松村ら，2006），安全確認（鳥越，2009）をすること。さらに，コミュニケーションの傾向や行動の観察（鳥越，2009；米山ら，2008；大曾根ら，2004；内田ら，2004），血圧の値など（Mihailidis et al., 2008；Tachibana et al., 2004），個人の特徴に合わせた《予防的視点による状態・行為の観察》を行い，高齢者の変化や異常の有無を確認することであった。この属性では，分野の違いによって，観察や測定の方法に違いが見られたが，高齢者の安否を確認するために行うという目的は同じ使われ方であった。

【住民や機関が協力した対象の把握】は，見守る側（支援者）が複数の人々で行う高齢者を見守る体制や関係，目的を示す属性である。ボランティア（帯刀ら，2009；榊田ら，2009）や民生委員等（榊田ら，2009；浜崎ら，2009）と協力する。ケアマネジャーと協働する（水上ら，2010），訪問対象者を分担する（榊田ら，2009；津村，2008），家族や親戚も参加する（津村，2008；加藤，2002）など《専門職・ボランティア・家族等の協力》により日常生活や健康状態を把握（榊田ら，2009）すること。さらに郵便配達（高橋，2010）や配食サービス（浜崎ら，2009）など高齢者の自宅を訪問する職種，警察や消防（帯刀ら，2009）などの《機関やサービスの活用》をすること。そして，関係する人々がお互いに名簿や緊急連絡先（前原ら，2011；帯刀ら，2009）など《住民情報の共有》すること。インターネットやメール，電話や放送（諏訪免ら，2010；帯刀ら，2009；鈴木ら，2005；加藤，2002）による《高齢者情報の伝達》を行いながら対象者の様子を把握することであった。この属性は，地域の高齢者を広く把握するために，それぞれが得意分野を活かしながら協力しており，特に看護学や福祉学分野で使用されていた。

2) 先行因子

地域で暮らす高齢者の見守りの先行因子は，【安心

して暮らすことへの希求】【生活に支障をきたすおそれのある高齢者の存在】【関わる人の高齢者尊重の姿勢】【地域での体制整備や仕組みづくりの動き】の4カテゴリであった。

【安心して暮らすことへの希求】は、高齢者は住み慣れた地域で暮らすことを望んでおり（酒井ら, 2010；福田ら, 2009；Calvert et al., 2009；伊藤, 2008；山中, 2001）、安心感を得たい（鈴木ら, 2005）気持ちと、孤独死への不安（酒井ら, 2010；本谷ら, 2008）を抱え《安心して暮らすことへの希望》があった。そして、安心を得るために見守りを受け入れる場合も《プライバシー侵害への懸念》（酒井ら, 2010；Calvert et al., 2009；鈴木ら, 2005）の気持ちがあること。また、《心の支えとなる亡き人とのつながり》（福田ら, 2009）を感じながら暮らしていた。

【生活に支障をきたすおそれのある高齢者の存在】は、地域で暮らす高齢者の特徴として、転倒の危険性（Hayes et al., 2010；酒井ら, 2010；米山ら, 2008）や、慢性疾患を有すること（Holzhausen et al., 2011；Oliva., 2010；山田, 2011；梶田ら, 2009；Wakefield et al., 2008；Loeb, 2006；山中, 2001）、さらに、認知機能の低下（米山ら, 2008）など《加齢や既往に伴う身体的特徴》があった。社会的な特徴としては、一人暮らしや未把握（山田, 2011；酒井ら, 2010；梶田ら, 2009）、閉じこもりや孤立を防ぐ必要性がある（森, 2011；武井, 2011；山田, 2011；高橋, 2010；斉藤ら, 2010；梶田ら, 2009；Sugden et al., 2008）こと、または復興住宅での生活（梶田ら, 2009；南, 2009）、互いに無関心な生活スタイル（前原ら, 2011）など《人とのつながりが希薄で孤立しやすい状態》であること。また、経済的な問題（梶田ら, 2009）や家庭環境による支援困難（青山ら, 2009；本谷ら, 2008；梶田ら, 2009）な状況や、高齢者虐待（高橋, 2010；長谷川, 2010；浜崎ら, 2009）などの《家族や社会的背景による重層的な課題》があった。

【関わる人の高齢者尊重の姿勢】は、コミュニケーションが図れる（鳥越, 2009）、疾病の理解（鳥越, 2009）、当事者の思いを大切にすることができ（松村ら, 2006；山中, 2001）といった《対象理解の感性》があること。そして、高齢者がより快適に過ごせるよう、生活背景を理解（鳥越, 2009；山中, 2001）し、生活を主体とした環境調整ができる（鳥越, 2009；山中, 2001）《生活を尊重する視点》があるこ

とであった。

【地域での体制整備や仕組みづくりの動き】は、国や自治体の施策等（前原ら, 2011；山田, 2011；斉藤ら, 2010）により、孤独死や虐待防止のためのネットワークづくり（武井, 2011；前原ら, 2011；諏訪免ら, 2010；斉藤ら, 2010；長谷川, 2010；梶田ら, 2009；帯刀ら, 2009）、関係者間の連携の強化（斉藤ら, 2010；長谷川, 2010；諏訪免ら, 2010；浜崎ら, 2009；梶田ら, 2009；南, 2009；津村, 2008；山中, 2001）など《人々のつながりや支え合いの体制づくり》であった。加えて、インターネットの活用（森, 2011；鳥越, 2009；本谷ら, 2008）、センサや電話回線を利用（酒井ら, 2010；斉藤ら, 2010；Koizumi et al., 2009；本谷ら, 2008；鈴木ら, 2005；加藤, 2002）した《情報通信機器等を活用したシステムの開発》であった。

3) 帰結

地域で暮らす高齢者の見守りの帰結は、【日常生活の維持】【個別の状況に合った予防的支援の促進】【安心感の獲得】【人やサービスの結びつきの拡大】の4カテゴリであった。

【日常生活の維持】は、見守りによって、高齢者の普段の状況やパターン、生理的变化から《普段の状態の理解》（森, 2011；本谷ら, 2008；Chaves et al., 2008；加藤, 2002）ができ、《身体機能の保持・増進》（Koizumi et al., 2009；Sugden et al., 2008；大曾根ら, 2004）となることや《在宅生活の継続》（南, 2009；鳥越, 2009；山中, 2001）へとつながった。

【個別の状況に合った予防的支援の促進】は、見守りによって《体調変化の察知》（森, 2011；酒井ら, 2010；斉藤ら, 2010；長谷川, 2010；伊藤, 2008；加藤, 2002）ができ、《状況を判断した個別支援》（高橋, 2010；鳥越, 2009；青山ら, 2009；米山ら, 2008；本谷ら, 2008；大曾根ら, 2004；内田ら, 2004；杉山ら, 2003；山中, 2001）が実施できることや悪化防止や事故予防など《早期対応によるリスクの回避》（武井, 2011；長谷川, 2010；高橋, 2010；津村, 2008；Wakefield et al., 2008；鈴木ら, 2005）へとつながった。

【安心感の獲得】は、見守りが《高齢者自身の安心》（森, 2011；福田ら, 2009；加藤, 2002）となるだけでなく、高齢者の日常の様子や無事が確認できることで、《家族や地域の人々の安心》（森, 2011；本谷ら,

2008；加藤，2002）となり，高齢者と関係者が見守り活動を通じてそれぞれが安心感を得ることとなっていた。

【人やサービスの結びつきの拡大】は，見守ることで《早期発見・早期対応の関係づくり》（武井，2011；前原ら，2011；長谷川，2010；梶田ら，2009）につながる。また，必要な支援に対する《新たなサービスや体制づくり》（森，2011；長谷川，2010；南，2009）となることや関係者間の意識の向上や関係性が再構築され，《人々のつながりの強化》（武井，2011；森，2011；長谷川，2010；斉藤ら，2010；水上ら，2010；梶田ら，2009；帯刀ら，2009）へとつながっていた。

2. 地域で暮らす高齢者の見守りの定義

概念分析の結果，地域で暮らす高齢者の見守りの概念は，《高齢者の心情や状況を考慮した距離を保持して，観察や測定による安否の確認をすることや住民や機関が協力して対象を把握すること》と定義した。

IV. 考 察

1. 地域で暮らす高齢者の見守りの概念

地域で暮らす高齢者の見守りの先行因子は，【安心して暮らすことへの希求】【生活に支障をきたすおそれのある高齢者の存在】という高齢者の要因と【関わる人の高齢者尊重の姿勢】【地域での体制整備や仕組みづくりの動き】という高齢者を取り巻く要因の2つに大別された。見守りを必要とする地域で暮らす高齢者は，安心して暮らしたいと願う気持ちや，身体的・社会的・精神的な理由で生活の継続が危ぶまれる状況があり，高齢者の個人的な要因は多様である。さらに環境的な側面として，高齢者を理解し生活を尊重できる人的要因や地域の仕組みや制度など社会的要因を要する概念だといえる。

属性は，【心情や状況を考慮した距離の保持】する姿勢を基本として，【観察や測定による安否の確認】や【住民や機関が協力した対象の把握】という見守りの目的や方法によって構成されていた。見守りによって日常が妨げられては，安心した暮らしとはいえない。高齢者の気持ちや状況を考慮して，高齢者と見守る人々との物理的・心理的距離が保たれることが重要であるといえる。

さらに，概念の使い方に着目すると，看護学分野で

は，より支援の必要性が高い高齢者に対して，支援を予測した距離で関わることや，予防的視点で観察するという特徴があった。工学の分野では，プライバシーへの配慮が他分野より強調されていた。これは，機器に馴染みのない高齢者の気持ちを考慮していると考えられる。分野による概念の使い方は，その専門技術を駆使した点に着目すると多様な印象を受けたが，概念分析により高齢者の安否の確認や対象の把握という目的を達成するために，それぞれの専門性を活かしているという点について共通していることが明らかとなった。

帰結では，見守りが高齢者個人の【日常生活の維持】や【個別の状況に合った予防的支援の促進】へ，さらに高齢者個人への影響だけではなく，家族や地域の人々の【安心感の獲得】や協力が【人やサービスの結びつきの拡大】へとつながっていた。これは見守りが，高齢者個人へ一方向で向かうものではなく，変わりなく過ごせていることを高齢者と関わる人が相互に確認することで，安心できる関係へつながると考えられる。さらに，地域で暮らす個々の高齢者への影響に加えて，家族や地域の人々との関係へと広い範囲で変化が生じる概念であるといえる。

2. 公衆衛生看護実践への活用と課題

わが国の高齢者に対して，介護予防（厚生労働省，2006）や孤立死（厚生労働省，2008）の予防的な働きかけが必要となっている。特に，高齢者の社会的孤立を防ぐため，組織的に高齢者を見守るシステムの開発（厚生労働省，2008）へ取り組みが行われている。

公衆衛生看護実践への活用に関して本概念は，高齢者を尊重して適度な距離を保ちながら関わる姿勢と，安否確認の方法や対象把握のための多職種の協力といった性質をもっており，このことが高齢者の日常生活の維持や個別の状況に合わせた予防的支援の促進という個々の高齢者への影響に加えて，家族や地域の人々の結びつきの広がり，さらに新たなサービスや体制の整備へ向けて活用の可能性がある概念であることが明らかとなった。つまり，地域で暮らす高齢者の見守りは公衆衛生看護が目指す健康の保持増進といった予防活動の推進と地区組織活動の促進へ向けて有用な概念であり，公衆衛生看護学分野の教育や研究の向上のために活用可能な概念であると考えられる。

公衆衛生看護実践への課題は，本研究では見守りを地域の多分野の専門職や家族やボランティアなどの非専門職が使用する概念として現象を広く捉えている。

そのため、公衆衛生看護職が担う見守りに焦点化して
おらず、看護職が担える機能は明確にしていない。今
後は、地域で暮らす高齢者の見守りを実践している看
護者の援助について明らかにし、多職種と協力する上
で看護職が担う機能を検討する必要があると考える。

V. 結 論

地域で暮らす高齢者の見守りの概念を『高齢者の心
情や状況を考慮した距離を保持して、観察や測定によ
る安否の確認をすることや住民や機関が協力して対象
を把握すること』と定義した。

本概念は、高齢化の進行が予測されているわが国の
公衆衛生看護学分野において、高齢者の実態把握や予
防活動の推進、地区組織活動の促進、さらに教育・研
究の向上のために活用可能な概念であると考えられる。

謝辞：本稿をまとめる過程でご指導いただきました、首都
大学東京大学院教授齊藤恵美子先生、助教呉珠響先生に心よ
り感謝申し上げます。

尚、本研究は公益財団法人ユニバーサル財団平成 23 年度研
究助成（助成番号 -11-01-110）を受けて行った研究の一部で
ある。

文 献

- 青山岸江，中嶋和子，稲垣美香，他（2009）：介護老人保健
施設における行動障害を伴う認知症高齢者への関わりーデ
イルームにおける食事・おやつ場面におけるケアスタッフ
の関わりからの抽出ー，日本看護学会論文集：老年看護，
39，228-230.
- Calvert J. F. Jr., Kaye J., Leahy M., et al. (2009): Technology
use by rural and urban oldest old, *Technol. Health Care*,
17(1), 1-11.
- Chaves P. H. M., Varadhan R., Lipsitz L. A., et al. (2008):
Physiological complexity underlying heart rate dynam-
ics and frailty status in community-dwelling older wom-
en, *J. Am. Geriatr. Soc.*, 56(9), 1698-1703.
- Dijkstra B., Kamsma Y., Zijlstra W. (2010): Detection of
gait and postures using a miniaturised triaxial acceler-
ometer-based system: accuracy in community-dwelling
older adults, *Age Ageing*, 39(2), 259-262.
- 福田早也香，山辺茜，池田亜弓，他（2009）：農村部の女性
独居高齢者が住み慣れた地域で老いていくことに対する思
い，北海道公衆衛生学雑誌，23(2)，160-166.
- 浜崎優子，堂田俊樹（2009）：高齢者虐待における家族の関
係性から見た介入・支援方法の検討 地域包括支援セン
ターで関わった対応困難事例の分析，家族看護，7(1)，
130-138.
- Harris T. J., Owen C. G., Victor C. R., et al. (2009): What

factors are associated with physical activity in older peo-
ple, assessed objectively by accelerometry?, *Br. J. Sports
Med.*, 43(6), 442-450.

長谷川恭子（2010）：八戸市地域包括支援センターにおける
ネットワーク構築の取り組み，地域ケアリング，12(5)，
16-23.

Hayes T. L., Riley T., Pavel M., et al. (2010): Estimation of
rest-activity patterns using motion sensors, *Conf. Proc.
IEEE Engineering in Medicine & Biology Society*, 2010,
2147-2150.

Holzhausen M., Fuchs J., Busch M., et al. (2011): Opera-
tionalizing multimorbidity and autonomy for health
services research in aging populations—the OMAHA
study, *BMC Health Serv. Res.*, 11, 47-57.

伊藤薫（2008）：家庭内高齢者虐待の発見および通報に関す
る介護職員への意識調査，高齢者虐待防止研究，4(1)，
127-133.

伊藤清一（2002）：高齢者の介護をバックアップするシステ
ム・生活空間・製品 介護支援情報システムー見守りシス
テムをご存じですか？ー，介護支援専門員，4(4)，97-101.

Koizumi D., Rogers N. L., Rogers M. E., et al. (2009):
Efficacy of an accelerometer-guided physical activity
intervention in community-dwelling older women, *J.
Phys. Act. Health*, 6(4), 467-474.

厚生労働省（2006）：地域包括支援センター業務マニュアル，
東京.

厚生労働省（2008）：高齢者等が一人でも安心して暮らせる
コミュニティづくり推進会議（「孤立死」ゼロを目指して）
ー報告書一，http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0328-8a_0001.pdf

Loeb S. J. (2006): African American older adults coping
with chronic health conditions, *J. Transcult. Nurs.*, 17(2),
139-147.

前原なおみ，津村智恵子，金谷志子（2011）：高齢者見守り
組織構築における専門職の役割，甲南女子大学研究紀要
（看護学・リハビリテーション学編），5，173-178.

榊田聖子，大井美紀，川井太加子，他（2009）：A 市におけ
る地域住民を主体とした地域見守りネットワーク活動の現
状ー地域別比較を通してー，甲南女子大学研究紀要（看護
学・リハビリテーション学編），3，111-120.

松村菜穂美，高橋勇（2006）：食事中的見守りを含めた個別
的介助量と要介護者の認知症・寝たきり度との関連性ー認
知症デイケアにおける秒単位の介助量測定から介助量の定
量化へー，病院管理，43(2)，91-102.

Mihailidis A., Cockburn A., Longley C., et al. (2008): The
acceptability of home monitoring technology among
community-dwelling older adults and baby boomers,
Assist. Technol., 20(1), 1-12.

南誠二（2009）：住宅施策と地域見守り活動の有機的展開，
月刊福祉，92(3)，28-31.

水上然，黒田研二（2010）：市町村における高齢者虐待防止
ネットワーク構築への取り組みと実績，日本在宅ケア学会
誌，13(2)，26-33.

森武俊（2011）：生活支援のためのセンサデータマイニング
ー「みまもり工学」への展開ー，電子情報通信学会誌，

- 94(4), 276-281.
- 本谷享寛, 中島一樹, 松井宏行, 他 (2008): 電子メール利用による独居高齢者生活状態遠隔見守りシステムの開発, 電子情報通信学会技術研究報告, **108**(52), 63-68.
- Mundt J. C., Kinoshita L. M., Hsu S., et al. (2007): Telephonic remote evaluation of neuropsychological deficits (TREND): Longitudinal monitoring of elderly community-dwelling volunteers using touch-tone telephones, *Alzheimer Dis. Assoc. Disord.*, **21**(3), 218-224.
- 内閣府 (2011): 平成 23 年度高齢社会白書, 印刷通販株式会社, 東京.
- 日本看護科学学会看護学術用語検討委員会編 (2005): 看護行為用語分類 看護行為の言語化と用語体系の構築 (第 1 版), 日本看護協会出版会, 東京.
- 西村武士, 白石旬子, 大塚武則, 他 (2008): 地域包括支援センターの現状と課題—地域における「見守り」活動の課題—, *老年社会科学*, **30**(2), 253.
- Oliva N. L. (2010): A closer look at nurse case management of community-dwelling older adults: Observations from a longitudinal study of care coordination in the chronically ill, *Prof. Case Manag.*, **15**(2), 90-100.
- 大曾根峰子, 大森みどり, 中野はるよ, 他 (2004): 抑制解除に向けての考察—見守りの看護を実施して—, *日本農村医学会雑誌*, **53**(3), 469.
- Rodgers B. L. (2000): Concept analysis: An evolutionary view, In Rodgers B. L., Knafl K. A., *Concept Development in Nursing* (2nd ed.), 77-102, W. B. Saunders Company, Philadelphia.
- 斉藤雅茂, 平野隆之, 藤田欽也, 他 (2010): 「小地域ネットワーク活動支援データ管理ソフト」の開発と設計思想—要援護高齢者への見守り活動の評価ツール—, *日本福祉大学社会福祉論集*, **123**, 85-95.
- 酒井亮嘉, 北間正崇, 木村主幸, 他 (2010): センサとネットワーク機器を用いた単身高齢者支援システム, 電子情報通信学会技術研究報告, **110**(354), 29-33.
- Sugden J. A., Sniehotta F. F., Donnan P. T., et al. (2008): The feasibility of using pedometers and brief advice to increase activity in sedentary older women—A pilot study, *BMC Health Serv. Res.*, **8**, 169-177.
- 杉山智子, 松井典子, 杉下知子 (2003): アルツハイマー型中期痴呆症患者に対する望ましいケアの検討—排泄・身支度ケアへの抵抗に注目して—, *老年看護学*, **8**(1), 31-38.
- 諏訪免典子, 永田久美子, 池田武俊, 他 (2010): 認知症高齢者の広域行方不明者に対応した見守り SOS ネットワークの確立に向けた研究, *日本認知症ケア学会誌*, **9**(2), 406.
- 鈴木隆史, 酒井太一 (2005): 高齢者の「見守り」に関する一提言—水道消費に着目して—, *福島県立医科大学看護学部紀要*, **7**, 7-12.
- Tachibana R., Tabara Y., Kondo I., et al. (2004): Home blood pressure is a better predictor of carotid atherosclerosis than office blood pressure in community-dwelling subjects, *Hypertens. Res.*, **27**(9), 633-639.
- 高橋英樹 (2010): 「見守り」に関する研究・序論—施策に組み込まれた「見守り」および「見守りネットワーク」—, *社会福祉士*, **17**, 140-148.
- 武井正憲 (2011): とともに支え合う地域ケアネットワーク—地域での新たな見守り・支え合いをめざして—, *月刊福祉*, **94**(1), 30-33.
- 帯刀繁, 栗津原昇 (2009): 退院後の在宅生活を支える地域包括ケアの構築に向けて—おとしより保健福祉センターを中心に—, *地域ケアリング*, **11**(8), 14-19.
- 鳥越和哉 (2009): 認知症の人を支える見守りを考える—理学療法士の視点から—, *認知症ケア事例ジャーナル*, **2**(1), 17-21.
- 津村智恵子 (2008): 家庭内における高齢者虐待の実態と対応, *老年精神医学雑誌*, **19**(12), 1317-1324.
- 内田陽子, 山崎京子 (2004): 痴呆高齢者のアウトカムを高める通所介護の取り組みと評価, *日本在宅ケア学会誌*, **8**(1/2), 73-81.
- Wakefield B. J., Montes J., Holman J. E., et al. (2008): Risk factors and outcome associated with hospital admission for dehydration, *Rehabil. Nurs.*, **33**(6), 233-241.
- 山田圭子 (2011): 壁になっているのは, 法律ではなく「人」そのもの—壁を消すための, 信頼を核にした関係づくり—, *月刊福祉*, **94**(2), 20-23.
- 山中美和子 (2008): 高齢透析患者・家族への導入期看護—CAPD の場合, 臨床透析, **24**(11), 1519-1528.
- 山中崇 (2001): 在宅医療のあり方, *臨床検査*, **45**(5), 465-470.
- 米山道, 太田和子 (2008): 大腿骨頸部骨折患者の問題行動と現状—症例を振り返って—, *磐田市立総合病院誌*, **9**(1), 29-34.